

村野次郎創刊

# 香 蘭



2021年(令和3年)2月号

第98卷

第2号

通卷1082号

二〇二一年(令和三年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第二号



# 香 蘭

2021年(令和3年)2月号  
第98巻 第2号 通巻1082号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(66) ..... 白井紀代子 ..... 表二  
作 品 ..... 1

二 ..... 25  
三 ..... 33  
推薦香蘭集 ..... 39

香 蘭 集 ..... 40  
近詠十五首 富弘美術館 ..... 2

作品一特選(十二月号) ..... 宮口・水本・牧野・長野・坪  
..... 相川 公子

作品二・三特選(十二月号) 青山(脩)・岩田・白井・江口・沙阿羅・鈴木(知)・  
..... 鈴木(桂)・伊藤(美)・石井  
中村(か)・三澤・河野・庄司・竹本・田中・中村(陽) ..... 18

村野次郎への旅(131) ..... 千々和 久 幸  
歌の生まれる場所(97) ..... 渡 辺 礼比子  
..... 22

七首 抄(十二月号) ..... 八木橋 洋子 ..... 24  
エッセイ・自由研究 母「園子」の一生 ..... 柏原(恵)・金子(幸)・藤本・山本(武) ..... 32

焦 点(十二月号) 採らなかつた、採れなかつた歌 ..... 千々和 久 幸 ..... 44  
夏から秋へ 身近な自然を詠む ..... 伊 藤 康 子 ..... 46

他誌拜見119 ..... 高 田 みちゑ ..... 48  
本田民子「三菱の街」評(十二月号近詠十五首) ..... 菅 沼 はる子 ..... 50  
作 品 評(十二月号) 作品一 ..... 満 木 好 美 ..... 51

作品二 ..... 伊 藤 美 恵 子 ..... 52  
作品三 ..... 本 田 民 子 ..... 54  
香蘭集 ..... 大 井 田 啓 子 ..... 55

文法あれこれ(21) ..... 田 中 あさひ ..... 58  
緑 地 帯 ..... 山 中 ・ 中 村 (陽) ・ 丑 山 ..... 60

明宝研究会第一一九回十一月例会 ..... 内 藤 美 也 子 ..... 62  
歌会及び会合・会員消息・他 ..... 70

編集後記・新宿日記 ..... 74  
表紙絵 ..... 中村 陽子「おしゃべりな木」 目次・緑地帯カット ..... 和 田 和 雄

表紙絵 ..... 中村 陽子「おしゃべりな木」 目次・緑地帯カット ..... 和 田 和 雄

過ぎし日は言ひてすべなし浮び来る面わ

うちけしほがらかにむ

『樗風集』

これは昭和五年（1930年）、村野先生三十六歳の時の小題「忌日近し」一連三首の三首目の作品である。大正十三年（1924年）六月にお亡くなりになった輝子夫人を偲んで詠まれた歌ではないか、と思われまます。

この歌には悲しみ、寂しさ、悔しさが滲み出ていると同時に、先生の優しさ、そして前向きな決意さえも感じられて好きな作品です。

私が以前、子を亡くし、自分を責めていた頃に、もし先生のこの作品に巡り合えていたらと思いつつ、私の愛誦歌とさせて頂きました。

最後に、掲題作品の前に掲載されている二首を併載いたします。

はなやかにをとめ衝を群れゆけど親のなや  
みはみな知らざらむ (一首目)

静もりて青葉にさせる夕つ日の明るきにす  
ぐ人を偲ぶに (二首目)

〔短歌新聞社文庫『樗風集』89頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない〕

## 四 選 者 の 作 品

俳句ですか 平塚 千々和 久 幸

爪を切る間さえ惜しみて何せしや何もせぬ間に爪のまた伸ば  
異議なしと叫びしはむかし手間暇をかけて温泉卵の殻剥く  
人生に意味などないかそうだった肉ジャガがまだ残っていたっけ  
何処にか花散りおらん叶わざること身にあるを華やぎとして  
紅葉はなかば散りたり片時も仕事離せぬ人をさびしむ

アメリカン頂きますわと言ったまま三日待っても帰っては来ず  
俳句ですかなどと手元を覗かるる ちえつハンバーガー落としちまって  
「妻不要の夫」とわれを評せしとう妻の無念は人づてに聞く

大新宿区の歌 横 浜 渡 辺 礼比子

「あたくし」の「く」を曖昧に発音す三代前より東京の人  
母校はも偏差値下がり産土はコロナに塗れ我古稀となる  
大仰に「国のみやこの中心」とわれら歌いし「大新宿区の歌」  
新宿のエスカレーター降りんとしよろけたる人 ああ同世代  
秋ふかき電停に君と立ちいたり靴の汚れを気につけながら  
午後おそき旅のグリラにもいわぬ夫と居りこの気怠さぞよき

「本来の自分の相撲がとれてない」評さるる彼も歯痒からんを  
この友も胸内に鬼を飼いと知りたれば寧ろ親しみ深し

朗々の声 鎌 倉 香 山 静 子

晴ればれと道歩めるはいつの日ぞ幼子さへもマスクをつけて  
食事会も茶会も避けるこの日頃ゆき交ふ人らの顔は曇りて  
大いなる危機は必ずあると言ふ我慢ガマンと思ひて歩く  
間違つて声をかけては失礼と眼伏せつつすれ違ひたり  
コロナ禍に振りまわされてゐるうちに令和二年が終はつてしまふ  
当然と思へど六人兄弟の末なれば二人目の兄を失ふ

この世には居らぬ兄なりわれを呼ぶ朗々の声耳に残りて

死は誰も避け得ぬものと知りつつもかくも悲しきわが兄の死は

こんぐらかりて 我孫子 丸 山 三枝子

七尾線は第三セクター 金沢よりふるさとまでは二時間一分  
ふるさとの空き家に掛かる黒板に遺れる父の(子供らがクルラシイ)  
ちかごろのこの誤作動はパソコンかわたしの指かたぶん両方  
夢のなかで夢かたりいる夢さめてこんぐらかりて今日が始まる  
片腕を挽かれたるよう電子辞書を忘れてきたる今日の歌会に  
人ざらいのおばあさん独り住む家の屋根に止まりて静かな鳩よ  
極月の本屋によりて鶉色の手帳を買ってカレーを食べて  
にんげんになりたい犬と人間をやめたい我と風を聞きいる

# 富弘美術館

## 相川 公子

ステイホームに倦みし人らで賑はへりわたらせ鉄道トロッコ列車

『風の旅』で読みぬしままの清流と山に囲まれ立つ美術館

コロナ禍で人なき富弘美術館 数々の詩画ゆつくりと見る

「みょうが」の絵に添へられてゐる母の詩よこみあぐるものかみ締めて読む

絶望の淵なる人の飾らない絵と詩に勇気づけられ帰る

「利休ねずみ」は少しぼやけた鼠いろ美術館にてそれを知りたり

富弘の五月描きしカレンダー旅せし町の食堂に見る

旅の間の居どころ不明を叱る子に安らぎてゐるわたしに気づく

娘こを持たぬ義母よろこばす術知りて嫁は絵文字のメール送り来

雨止みて急に秋めく貸し菜園オクラの花のみづみづと咲く

落葉のひそかなる音ききながら寺へと続く坂道のぼる



## ひと言随想

### 日帰りの旅

剪定の音きこえくる小春日の道の真中に寝そべる野良猫よ

雑踏の街をぬけきて夕映えの銀杏黄葉の並木をあるく

旧岩崎邸の学芸員がすすめるしあの大銀杏も黄葉してゐむ

久々に会ふ友を待ちカフェにゐる夕暮れの町見下ろしながら

十一月はじめ、久し振りの外出で歌友と富弘美術館を訪れた。

早起きをしてJR、東武鉄道と乗り継ぎ、紅葉のはじまったわたらせ渓谷鉄道に乗った。トロッコ列車はステイホームに倦んだであろう人達で、ほぼ満席であった。

四時間近くかけて着いた美術館は、コロナ禍もあってか、思った程混んではおらず、静かな雰囲気の中で鑑賞できた。筆を口に銜え

て描いた水彩画に詩を添えた星野富弘の作品は、以前その著書『風の旅』で知っていたとはいえ、改めて強く心を打たれた。

展示されている数々の詩画に、生来の精神的な健康さに加え、信じるものを持っている人の強さと豊かさが偲ばれた。

齢を重ねながら、怠惰な日々を過ごしている己を反省して終えた実り豊かな日帰りの旅であった。

# 作品一特選



(十二月号作品から)

千々和 久幸 選

父の居た場所

東京 宮口 弘美

すこーんと突き抜けた空に兆しくる虚無の翳りを見て立ちつくす  
縁側に父の位牌を持ち来たり夕暮れ時に父の居た場所

それらしき歌を並べて今月も「香蘭」汚す楽しからずや

ちちははの家の縁側ちりりんと風鈴が鳴るああ夏が逝く

熱々のお皿のどこをどのように持っても熱いワタシイキテル

自粛期間迷惑電話も鳴りひそめ解除と共にまた動き出す

たぶんもう寄ることもない亡き父の蟲屑にしたるゆべし屋を過ぐ

・大胆に一直線に歌うところが魅力。直情と溜めの按配が今後の課題。

沈黙を守る

倉敷 水 本 美恵子

無花果の広葉の上に翅を閉ちおハグロトノボは沈黙のまま

この夏の外出自粛に馴らされてひと月ほどは電車に乗らず

不自由は不自由なりに生きてゆく冷凍の魚冷凍の肉

橋の樹は樹下に落蟬かくまひてつくつく法師鳴かせてをりぬ

鉄路沿ひの朝顔小さき花咲かすはるか昔のままの青色

時々健康ドリンク飲みほして身を騙したる夏のゆくらし

コリウスの緑あらたに色増して秋さざしくるあしたの風に

・肩の力が抜けて作者の佳い面が出ている。安心して通過しよう。

蟬の骸

町田 牧野 道子

瀬戸内のひかりを浴びて育ちたるオレンジのジャム今朝でおしまひ

コロナ禍に猛暑の続きこの朝は息子がスズメバチの一撃喰らふ

精一杯生ききりたると思ひをり蟬の骸が枯葉にまじる

検温に身分証明提示して入りし母校だあれもぬない

度たびを時計確かめ正座してLINE歌会の始まるを待つ

猛暑日を忘れLINEに繋がりがりし午後をどつぷり歌にまみれる

八月尽秋を装ひカマキリがわれの帰宅を門に迎へる

・清朗なうた日記の趣、身辺の素材を巧に掏って楽しませる。

方向音痴

横浜 長野 道子

山田さんと呼びとめられぬマスクして外出すれば山田さんになる

ゴスペルの仲間にごうぞと誘われしは歌声よりも体型ならし

右左歌声にあわせてステップしここでもわれは方向音痴

検査終え病院内のコンビニに新発売のおにぎりを買う

若見えに励みましたとメールくるダンス再開の女ともだち

団欒も会話もなきが夫の焼くホツケの焦げにはいろりの匂い  
純愛を貫くごとし空っぽの花鉢の苔のひとつまみほど

・持ち前のユーモアのセンスと、七首目は持ち前の理屈の不熟もあって。

のつべらぼう

東京

坪

裕

夏の陽のひと日の終りにマンションも人家も真赤に炎上したり  
コロナ禍にマスクが重し駅中をのつべらぼうの人々が行く  
戦争は朝から起きる吐き出されようやく俺はサラリーマンになる  
選別を受けるリングゴのようにして人はうつむき地下へと下る  
死んだあと柩でなくて棺桶が俺には似合う注文しとこ  
その内に自動運転の世がきたら人間みんなバカになりそう  
手のひらでやさしく包むようにして君は言葉を反芻しており

・ユニークな把握はむろん、五、六首のような綻びもまた魅力。

九月

西宮

鈴木

桂子

口内に苦味残れり目覚むれば子に浴びせたる言葉さびしも  
まちがひをして来しやうなわれかとも子の反撃に企ひて思へば  
やつかない娘、息子が輪をかけてやつかないのはあなただと言ふ  
外に出ればわつと現はる眼前に大きな月九月二日

「古くても新しくても文学はいいものはいい」娘がわれに言ふ

国語一級免許もつ娘が龍之介、漱石読めず補註なしでは

水の辺に咲きなだれたる山萩の花ほろほろと秋深みゆく

・事実から今少し浮上すること、雅より斬新な表現をこそ。

夢のその先

川崎

伊藤

美恵子

失われし時を求めて駅へ行くバスに半年ぶりに乗るなり  
秋深しドンペリ好きの亡き友をへのどこし生んで思んでおりぬ  
馬酔木の木見ればいつでも声がする「下手くそな歌いつまで詠んでる」  
いつも見るさびしき夢のその先にこたびはうれしき展開のあり  
強き風起こして落葉を吹き飛ばす機具は落葉を吹き飛ばすだけ  
茶毒蛾をおそれて山茶花の枝みんな払えば山茶花は一本の棒  
何ごととも疲れるばかりでもものにならず八十一歳面白くもなし

・三、七首目、短歌への怨みは短歌で晴らすに如くは無し。

をかした秋

習志野

石井

雅子

空にゐるあなたへの文「今わたしをかした秋に生きてみます」と  
突然に通り過ぎたる豪雨なり号泣したるやうな傘干す  
マシユマロとクリームパンで出来ている心ときどきべちゃんになる  
ベッドより真鶴の海見る友か逢いに行きたしコロナでゆけぬ  
犬猫の嫌ひな夫の二人子はそれぞれ犬と猫を飼ひをり  
正直な顔して平気で嘘をつく犬の気持ちなど与り知らぬ  
閉ちかけのエレベーター開け自転車ウーバー・イーツ人が駆け込む  
・をかした時代の「をかした秋」は秀逸、このセンスで駆け抜けよ。



# 作品二、三特選



(十二月号作品から)

桜井京子 選

## 〈作品二〉

夏惜しむ

米子 青山 侑市

必携のベットボトルは二本とす日照り畑の伴侶に足れば  
水涸れの河原を少し歩きみる行脚の僧のこころを思ひ  
まれまれに自転車のみ速出なり天高くても低くても良し  
沓脱ぎに腰を下ろして手火花を独りで散らす秋のはじめに  
なんとなく独り嗜むものなれど清酒は聖酒そんな気になる

・自然体で詠み「独り」に押しつけがましきのないところが良い。

半 月

安来 岩田 明美

けふの暑さ納めた空に際立ちてレモンのやうな半月の出づ  
救急車の音の消えゆく夜空には酸っぱいほどに黄なる半月  
灯を消せば闇の拡がる吾が臥所虫の音すだくにかかせて眠る  
かなたまで人影見えぬ土手の道マスク外して鼻歌でゆく

・四首目はコロナ疲れを癒す歌。解放感があつて微笑ましい。

真夏日の中

長野 白井 紀代子

この夏もヒマワリぐんと背を伸ばしあまた私置いてゆかれる  
大口を開けてカラスは息を吐く今日も朝からジリジリ暑い  
切り絵かと思まがう襲のアルプスを屹立させるくれないの空  
寂しさもふわりふわりとあたたかく土竜が月を見ていそうない日  
・四首目は童話的な味わいが楽しい。土竜もきつと寂しいのだ。

九月の雨

柏 江口 絹代

ペランダに煙草ふかして子が一人夏の寂しさ追いかけている  
人間より長生きするはず手賀沼のかっぱ九月の雨に濡れている  
ほしいもの何かわからぬ手に入れたものはマックのダブルバーガー  
母の家の黒猫平たく歩み来る夏の終わりは誰もさびしい  
椅子の上にチョンと座りて我が母は九十七歳になりてしまぬ  
・夏の終わりの寂しさがじんわりと染みて来る一連である。

この秋は……

相模原 沙 阿 羅

茂るだけ茂つておいて花咲かず実を付けずいる風船蔓  
お風呂場の水音止まれば虫たちはまた鳴き始めここぞとばかり  
台風の前より雨の曲を聴く雨は静かに降るのが綺麗  
成人になる誕生日が締め切り日ノベル学部で長編書き下  
・一、二首目、自然界にあるものたちの気儘な息遣いが聞こえる。

秋

茜

笛吹 鈴木 知良

秋茜あまた遊ばせ柳蘭たんぼの道に連なりて咲く

赤石の山嶺越え来し友ありき逝きし知らせに山を拝むおろが

銀山の職人まつりし石窟に羅漢座像のあまたひしめく

くらき厨子におはす如意輪観音像人差し指を頬に近付けたまふ

・一首目に心惹かれたが、幅広い素材を丁寧に詠んでいる。

彼岸花 福岡 中村 かよ子

彼岸花咲いても咲いても咲ききれぬ山野を赤き川ゆくごとし

彼岸花は光の器唐突に開いて消える銀河の一部

空覆う雲の重さの一滴よ私に落ちよ最初のしずく

ガラス打つ雨の模様が細くなるスマホの充電又切れていた？

・一、二首目、彼岸花を大きなスケールで捉え大胆にデフォルメした。

冷たい視線 横浜 三澤 幸子

わが窓にかすかに届く風鈴の姿を見たり裏道の軒

大型の台風来ると局ごとに予報士たちは渦巻を指す

ピコピコとご機嫌ななめのエアコンに取説出番の近頃多し

・日常を軽いウィットで捉えて層の凝らない歌。

### 〈作品三〉

あの夏 鎌倉 河野 慎 二

振り返るたびに眩しきあの夏の心に樟の木はありますか

三枚に魚を下ろしぬ晩夏の出刃の沖より波立たせつつ

病みてなほ愛せぬ母よ頼杖のままに見てゐる夜は更けにけり

・二首目の見立ての面白さを採るが、他は表現にとらわれ過ぎか。

遠くなりゆく 横浜 庄司 健造

秋風にひらきはじめる夕化粧とぎれとぎれの遠雷をさく

つまずいてたたらを踏んだ目の先にあかのまんまが咲いておりたり

何もかも覆いつくせる葛の葉に秋はきておりむらさきの花

・一、三首目の結句が利いており二首目も短歌の勘所を押さえている。

マヌカハニー 千葉 竹本 幸子

ひと匙のマヌカハニーのお陰かも今日の私は少しおしやべり

スマホにてテレビ電話の出来ること夫に内緒のひとつとなりぬ

日常が様変わりした令和二年ほどけたリボン結べずにいる

・ユーモラスな把握が素材を膨らませて面白い。

終の祈り 取手 田中 あさひ

蟬たちのこゑはこの世の空に満ち積乱雲を押しあげてゐる

おそらくは別れのあいさつに來たのだらう九月五日の油蟬はや

群るるなく生きつくしたるものたちの終のいのりをみとけやらむ

この星の胎へちひさき卵うんとなり蟬の族はもどりゆくべし

・蟬への心寄せが生命への慈しみに繋がっている。

影向の松 東京 中村 陽子

昼の熱さめた夜ふけの暗がりに猫が寝転ぶ平らになつて

夜の更けの天井見れば紙魚ひとつ小さく動き息づいている

病院の待ち時間あり今日は来てつくづく眺める影向の松

・細部を凝視し結句が全体を浮き上がらせた。

村野次郎への旅 (131)

「ザムボア」と次郎 (二十三)

千々和久 幸

の畑

石野正太郎

前期「朱戀」は明治四十四(1911)年十一月に發刊され、大正二(1913)年五月までに十九冊を刊行して廢刊となった。その後を継いだ後期「ザムボア」(朱戀)は、大正七(1918)年一月の復活號から、同年九月までの九冊を刊行してこちらも廢刊。

ちなみに後期「ザムボア」(朱戀)の編輯發行人は六月號までは北原章子あきこだが、七月から九月號までは河野慎吾である。

本エッセイではその足跡を作品を中心に大急ぎで辿ってきたのだが、読者からは慎吾、次郎の作品評がもっと読みたいとの要望があり、いままし読んでおきたい。

・太葱の葉尖ごとくへし折れて霜白き朝の畑に出でつゝも 荒木 暢夫

○河野。荒木君は勉強して呉れるので有難い。この一首の三、四、五句はも少し言葉のリズ

ムと心持の確實性とを強調して貰ひたかつた。  
○村野。君は技巧に構はず無造作に表現してしまふ癖がある、之が所謂君の長所でもあり缺點でもあると言ふ所である。此の歌等はそれの例に洩れない。大膽と言ふ事が成功する時だけに使用されるとよいと常に思つてゐる。此の歌の結句は餘韻稍少なき恨がある。

・初しぐれ頭そろへてならびたる籠の小鳥の 赤きくちばし 岩淵百合子

○河野。奇麗な日本繪を見るやうな表現であるが、根底が浅い。更らに深くもつと突き進まなければ永遠の力を拉し來る事が六ヶ敷い。單なる繪畫的な歌は奇麗である、がただそれまである、淡くはかないものである。

○村野。此の次の歌(注・吊しある籠の小鳥のよりそひて鳴き止みにたり雨降るらんか)と共に佳作である。女らしい歌である。吾々は男と同じ尺度で計らうとするものではない。

女でなければ解されない所が多々あらうから其處へ向つて河野君の言ふ通り進んでもらひたいのである。

・人が皆かむれる白き手拭の光り淋しき青菜の畑

○河野。結句の名詞止がいけない。「白き手拭」「青菜の畑」の白と青の對照が餘りきわど過ぎる。青のなかに白いものを配合するのは繪畫的色彩法としては必要であるが、歌として殊に此一首の場合に於ては、それ以上の何にもものも出てゐない、之れは考ものである。もつと深いものを求めて單に眼先ばかりの歌をなるべく避けて戴きたい。

○村野。最初の名詞止は重すぎるし最後の歌の下句の轉換した方法は軽すぎた。序に結句について一言する。一体結句は他の如何なる部分より重要である。其は讀過してから他の部分より一番印象が深く残る事から原因する。西洋や支那の詩が日本のものより最後のリズムを合せて行く事に付いて一層苦しむのは茲に根據を置くからである。吾々のよくよく注意すべき事と思ふ。

以上の「正月號歌評」は、二月號に所収の



もの。三首目の作者石野正太郎は、後に「香蘭」の選者となり活躍した。

・草むらに出せし骨は釜のまま夜風に吹かれ  
いまだ燃えゐる  
酒井 廣治

○村野。第一句「草むら」なる語によつて作者は先ず其の場所を現はす事に就いて充分成功してゐる。夜風に吹かれて燃えてゐる有様も眼に見えるやうである。數ヶ月前から「弟の死」の歌は凡て正直なところがあつてよい、此の歌もさうである。技巧上の僅少の瑕疵より第一に必要なのは正直な事である。兎に角斯う言ふ場合に於ては當時のエンヴァイロメントが浮薄な態度を絶対に許らさない為めであらう。歌は心の浄玻璃なることを呉々も忘れてはならない。

○河野。今月の詠草は去年発表した弟の死と共に光つて居る。緊張した感情をゆとりのある氣持である程度まで生かして居るのが何より有難い。然し作者が自然に對した時にはどうも失敗した作が多いやうである。之は注意すべき点である。

・今ははや壁のしみさへ數へ盡きぬ夜半にめざむるくせは久しも  
深野庫之介

○村野。病室に横たわつて、飽き飽きした氣持は出てゐる。今度投稿歌數は可成り多かつたが何れも卒直に自己の世界を歌つてゐるのはよい。

○河野。一二三句に少し無理がある。三句の字餘りも一句が軽いので浮動してゐる。然し總体作者はしみじみとして來た。此處からしつかり歩み出さなければならぬ。

以上は「二月號歌評」から引いた。二首目の作者深野庫之介も後に「香蘭」の選者となつたが、村野先生の存命中に新たに結社を興し、「香蘭」を去つた。

・物言ひてせわしき時は耳速き母にも荒く用言ひすてぬ  
荒木 暢夫

○村野。近頃君の歌は大層しんみりして來たこれはよいことである。今度は嚴選してあつたのであらうか何れも偽はらざる心の告白が見えてうれしい。三月號の中でも優れてゐる方である。

○河野。この一首は予の感心した歌である。この傾向は少くとも作者にとつて力強きものである。如何にも微細な心理状態を掴んで或

程度まで力強く表現されて居るのは甚だうれしい。どうぞ自重して下さい。

・夕まけて外のもしみに風ふけばいゆく荷馬の脚早みかも  
池上 秋石

○村野。矢張り君の歌の中での佳作であらう大した難はない。

○河野。この作者のよい所を表はして呉れるこの一首も何となく捨て難い味がある。二句の「外の面しみに」と四句の「いゆく荷馬の」が少し氣にかかるやうであるが、作者の掴んだ所は肯かれる。

以上は「三月號」歌評から。ところで二月號の酒井廣治「草むらに出せし骨は」にはこの光景にぎよつとしたが、村野先生の評には解らない個所があつた。エンヴァイロンメントは「周囲の事情」といふほどの英語だから読み過ごせるが、「浄玻璃」にはお手上げだ。「浄玻璃」なら広辞苑にあるがどうだろう。「藜」は「璃」の誤記なら意味的には通じることが、解る方があればご教示願いたい。

先生との会話ではしばしば英語が飛び出してきたが、これは恐らく夫人とは難しい日本語は英語で話をされたからであらう。